遠藤周作文学の研究
―宗教・ジェンダー・〈痕跡〉―

（要約）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：Ｄ１６４５９３

氏　　名：余　盼盼（ヨ　ハンハン）

序章

本論文は、現代作家遠藤周作（1923-1996）の文学を〈宗教〉、〈ジェンダー〉、〈痕跡〉という三つの鍵概念によって考察するものである。

最近まで、宗教研究とジェンダー研究という両分野の関係は、ウルスラ・キング（Ursula King,1938-）のいうような「二重の盲目」（double blindness）によって特徴づけられてきた。つまり、ジェンダー研究者が宗教に対して目を閉ざし、無関心であったのと同様、ほとんどの宗教研究者もまたジェンダーを度外視していたということである。そのため、従来の日本文学研究では、「宗教とジェンダー」という複眼的視点を用いた考察はきわめて少ない。本研究は、そのような状況を見直し、宗教研究とジェンダー研究の交流の促進に資するものだと考える。そして、文学研究の視点をも加味した学際的なアプローチによって、「宗教とジェンダー」研究の新しい可能性を模索する試みでもある。

文学における宗教とジェンダーを研究するにあたり、遠藤文学は題材も豊富で、非常に興味深い対象である。遠藤は、戦後の「第三の新人」の一人として、また代表的な日本人キリスト教作家として広く知られている。彼は、〈日本人とキリスト教〉、〈悪と救い〉といった宗教的テーマを自らの文学の根幹に据えながら、日本におけるキリスト教の文化内開花（inculturation）に精力的に取り組んできた。そのような彼の特異な創作姿勢は、日本国内だけでなく、世界的にも注目を集めている。

一方で遠藤研究においても、現状ではジェンダー研究と宗教研究の間に壁が存在している。遠藤文学で語られる宗教の奥に潜んでいる、ジェンダーのレンズを可視化し、宗教とジェンダーの交差の可能性を探り、そこから作品解釈の多様性を紐解いていく。これが本研究の第一の目的である。

加えて、遠藤文学を読み解くもう一つのキーワードとして〈痕跡〉という概念を取り上げる。〈痕跡〉は遠藤文学全体を通して宗教的にもジェンダー的にも深く関わる概念である。しかし、先行研究において〈痕跡〉は主に個別の作品論において分析されているのみである。そこで本研究では、この〈痕跡〉を、遠藤文学を貫く主要モチーフとして捉え直し、〈痕跡〉の視点から遠藤作品を再解釈する。これを本研究の第二の目的とする。

上記のような目的のもと、本論では、遠藤文学を初期（1951-1959）、中期（1960-1980）、後期（1981-1996）という三段階に分けて考察し、以下の三部構成で論述を展開した。

第Ⅰ部　初期文学における宗教・ジェンダー・〈痕跡〉

第Ⅰ部では、遠藤文学の原初的な基盤を探り、初期作品における宗教とジェンダーの交差点、及び〈痕跡〉というモチーフの描かれ方を明らかにした。

第一章「〈井戸〉のモチーフの継承と展開―「フォンスの井戸」から『青い小さな葡萄』へ―」では、遠藤の処女短篇「フォンスの井戸」（「群像」1951.9）と最初の長篇『青い小さな葡萄』（「文学界」1956.1-6）を取り上げ、両作に共通する〈井戸〉のモチーフをめぐる生成過程について分析を行った。具体的には、〈井戸〉のモチーフの削除と復活をめぐる改変の経緯を解明し、〈井戸〉のモチーフに対する遠藤のこだわりを明らかにした上で、〈井戸〉とは、普遍的な〈悪〉が潜む無意識の象徴であることを示した。さらに、〈井戸〉のモチーフが継承されていく中での変化と拡張を解明し

た。特に、〈蜘蛛〉のメタファーに注目し、それが象徴する〈悪〉が〈私のなかの悪〉という問題にまで拡がっていっていること、そして〈悪〉に対する能動的、積極的な対抗姿勢が見られることを指摘した。

第二章「「神の痕跡」としての〈葡萄〉―『青い小さな葡萄』論―」は、『青い小さな葡萄』で新たに導入された〈葡萄〉のモチーフの役割について分析を行った。登場人物一人一人の個別性を越える〈葡萄〉の役割に着目し、それが遠藤の初期評論に見られる概念である「神の痕跡」として解釈できることを示した。さらに、生成過程における〈葡萄〉の導入とその役割から、小説家遠藤の誕生と成長の過程を読み取った。

第三章「共苦する神と「母性」―『聖書のなかの女性たち』論―」では、エッセイ集『聖書のなかの女性たち』（「婦人画報」1958.4-1959.5）を取り上げ、本作に描かれているキリスト像を、「共感共苦性」と「母性」という二つの側面から考察し、遠藤のキリスト観を同時代の神学者・思想家と比較することで新たな評価を試みた。

〈アウシュビッツ以降〉、神の正義もしくは神の愛を語ることはできるだろうか。この問いに答えるべく、遠藤は、人々の弱さに寄り添い、共感共苦するキリスト像を聖書の中から発見し、神と人間の「苦しみの連帯」を文学的に創り上げている。このような遠藤の文学的な営為は、同時代の西洋の神学における動き、とりわけポストホロコーストのユダヤ・キリスト教神学に見られるような、「全能で無感動な(apátheia)神」から「苦しむ神」へという「神概念の革命」（モルトマン『十字架につけられた神』）と軌を一にしている。

加えて、キリストがマリアと重なり合うことによって示現される神の「母性性」という遠藤の考え方に関して、エーリヒ・フロムのいう「母性宗教」という思想と結びつけて検討し、さらにフェミニスト神学者のそれとも比較してみた。〈アウシュビッツ以降〉という同時代的な文脈において、既成の制度としてのキリスト教、ひいては西洋社会を支える「象徴的秩序」に対する批判・反省という点において、遠藤とフェミニスト神学者たちの思想は極めて近似的な方向へ向かっており、パラレルに位置づけることができるという解釈を示した。ただし、「父なる神」に対して「母なる神」を主張することは、本質主義的なジェンダー二元論が前提となっている。マリアの「母性」の捉え方に関しても、家父長制の枠内において女性抑圧の装置としての「母」という一面がその根底に見られる。ここに、初期遠藤のジェンダー観の時代的な刻印と限界性があるという結論を得た。

1980年代以降、男性学の研究の発展により、男性的な神のイメージが、宗教的文脈における、「男らしさ」の構築に与えている影響が、注目されるようになった。男性ジェンダー化された神・キリストのイメージが「男性性」を正当化すると同時に、「男性性」を不安定化させてしまうということが指摘されてきた。こうした宗教的伝統における男性信者の抑圧という問題は、遠藤文学においても重要なテーマである。続く第Ⅱ部ではそれを論じている。

第Ⅱ部　中期文学における宗教・ジェンダー・〈痕跡〉

第Ⅱ部では、こうした「男性性」の問題に焦点を当てながら、遠藤中期の作品において主に男性

の視点で捉えられている〈痕跡〉、そして宗教とジェンダーの交錯を浮き彫りにした。

第四章「〈痕跡〉と「手記」の意味―『わたしが・棄てた・女』論―」では、『わたしが・棄てた・女』（「主婦の友」1963.1-12）を取り上げ、本論文のキーワードである〈痕跡〉の意味と機能を明確にした。具体的には、男性主人公「ぼく」（吉岡）の「手記」に出てくる三箇所の〈痕跡〉をもとに、詳細にその意味の確認と役割の分類を行っている。これらの分析を踏まえて、「手記」を「書く」ことは、〈魂〉に刻まれたミツの〈痕跡〉を認めた「ぼく」が、〈痕跡〉の背後にある神の呼びかけに応えていくことであるという解釈を提示した。

第五章「〈弱者〉の語る宗教・国家・ジェンダー――『死海のほとり』論（1）―」では、『死海のほとり』（新潮社、1973.6）の奇数章に当たる〈巡礼〉の部を取り上げ、そこに語られる「私」の苦しみを宗教・国家・ジェンダーという複合的な観点から浮き彫りにした。まず、本文で言及されている「私」の「原型」の意味とその形成過程を追いながら、戦時下における国家公権力と宗教の衝突（ヘゲモニー闘争）という表象の下にひそむジェンダーの問題に着目し、「私」を束縛している男性ジェンダー規範を炙り出した。これらの分析を通して、国家と宗教のイデオロギー装置によって作られた男性ジェンダー規範の抑圧を多重に受けていた男性信者の苦悩が、「私」の語りによって、浮かび上がっていることを論じた。

第六章「イエス像の変容と「ねずみ」の〈痕跡〉―『死海のほとり』論（2）―」では、〈巡礼〉の部の主人公である「私」に生じたイエス理解の変化を考察した。まず本作で言及されている「事実のイエス」、つまり「史的イエス」をめぐる探求の実質を理解するため、当時の聖書学の研究の状況に触れながら、本作の登場人物が抱いている「無力なイエス」像と、教会で教えられている「力あるイエス」像との齟齬について分析した。また、〈アウシュビッツ以降〉という文脈を踏まえつつ、「私」のイエス像をフェミニスト神学の視点から捉え直した。結果として、「無力なイエス」／「力あるイエス」は、家父長制の覇権的な男性支配に基づいた「力」という概念を元に構築されたイエス観の表裏であることを指摘している。一方で、「本当のイエス」を探る過程において、「私」とイエスとの関係における新たな局面が開かれることが示唆されている。そのことに、「ねずみ」というあだ名を持つポーランド人修道士の〈痕跡〉が重要な役割を果たしていることを論じた。「ねずみ」について回想していくうちに、「私」は「ねずみ」が宗教的・ジェンダー的規範の軛を負う〈同伴者〉であることに気づく。それによって、自分そして「ねずみ」における神の〈愛〉への渇望にも理解を得るのである。

第七章「〈同伴者イエス〉の〈痕跡〉と「十三番目の弟子」―『死海のほとり』論（3）―」では、主人公の「私」が最終的に獲得したイエス観と、それにともなう「私」とイエスの新しい関係性について考察した。まず、〈巡礼〉の一三章における複雑な構成を整理し、「ねずみ」の最期を「私」がどのように受け止めたのかを明らかにした。そして、「私」が最終的に〈同伴者イエス〉という認識に至るために、「ねずみ」に刻まれた、イエスの〈痕跡〉に気づくことが非常に重要な意味を持つことを指摘した。加えて本作には、「私」の〈痕跡〉体験に基づき、「私」自身によって書かれた「十三番目の弟子」という作品が組み込まれていることも論じている。また、本作に見られるイエスの

〈脆弱性〉、イエスとの相互的な関係、および 「母の痕跡」を通した「母なる神」のイメージを指摘し、最終的に本作が「家父長的な神」の偶像性を暴き、神の〈力〉の再考を促す作品として評価できることを指摘している。一方で初期から引き継がれている「母なる神」という主張は、「厳父」／「慈母」という家父長的なジェンダー役割が前提となっている。そこにこの時点における遠藤のジェンダー観の限界が窺えるという結論を得た。

1960年代の第二バチカン公会議以降、フェミニズムの影響により、高等教育を受けた西洋の女性たちの間には、母親としてのマリアを拒絶し、軽蔑する傾向が見られる。これは、70年代以降の日本社会における女性の変貌と一致している。「近代」の娘たちは、これまで主として男性中心的な視点から定義されてきた「母」との関係性を切られ、あるいは自らの手でそれを切りすてている。それでも、中には、制度内の「母」でなく、自分のことを真に理解し、共に苦しんでくれる〈母〉を追い求める者がいる。彼女たちは、どのように〈母〉との繋がりを回復し、真実の〈母〉を見いだすのか。この問題については、第Ⅲ部で検討している。

第Ⅲ部　後期作品『深い河』における宗教・ジェンダー・〈痕跡〉

第Ⅲ部では、晩年の作品である『深い河』（講談社、1993.6）を取り上げ、第Ⅰ部で述べた二元的な人間観と女性ジェンダーの繋がりを改めて検証し、本作における女性表象と神表象との関連性を考察した。その上で、作者遠藤の宗教観とジェンダー観の到達点について最終的に評価した。

第八章「美津子の〈真似事〉とその挫折―『深い河』論（1）―」では、女性主人公である成瀬美津子の人物像を考察した。美津子は大学時代から印度に赴くまで、様々な演技や真似事を行っている。本章ではまず、各段階における彼女の〈真似事〉の分析とその挫折の要因をまとめてみた。それによって、美津子の〈真似事〉の実質は、男性側が求める理想の女性像、性規範に基づいたジェンダー・パフォーマンスであることを指摘した。しかし、それらの真似事は全て挫折している。共通する挫折の原因として、男性中心的な価値観に抗う自分と、それに従順な自分との絶え間ない葛藤による満たされない「空虚感」が考えられる。以上のことを明らかにした上で、結局のところ、そうした相対的価値観を超える、絶対的なものへの憧憬と渇望が彼女の行動の根幹にあることが分かった。

第九章「啓子の実像と隠された役割―『深い河』論（2）―」では、男性主人公の一人磯辺の妻・啓子の人物像に光を当て、その実像と隠された役割を論じた。まず〈良妻〉と〈母なるもの〉という対男性関係のフィルターを通した啓子の外面的なイメージを整理し、〈近代家族〉の成立をめぐる、同時代的な背景と結びつけながら論じた。次に、美津子から見た啓子像を「女性同士」の関係性という視点から抽出した。さらに、次に、啓子の語られていない内面を探り、〈人生〉の次元における夫との関係への渇望を看取した。最終的には、啓子の存在がいかに磯辺にとっての〈人生の同伴者〉となり得たのかを明らかにした。

第一〇章「美津子における〈母〉、〈チャームンダー〉と〈痕跡〉―『深い河』論（3）―」では、まず、啓子と比較しながら、美津子のジェンダー・パフォーマンスをめぐる葛藤について改めて確認した。次に、〈母なるもの〉への思いの内実について、美津子の語られぬ実母という視点から検

討した。また、本作において〈生活〉から〈人生〉へというように語られる美津子の歩みを、〈母〉そして大津の〈痕跡〉の働きと結びつけて再解釈した。印度において、美津子が〈母〉なる女神、チャームンダー像との出会いを通して、〈愛〉の実感を得、〈真似事〉からの解放を遂げていく過程を明らかにした。

本作では、美津子が「母性」というジェンダーの制度を超えた〈母〉を追い求める物語と、大津が宗教の枠組を超えたキリストを追求する物語がパラレルに描かれている。そして最終的に大津と〈同伴者イエス〉、更にチャームンダーが重なることによって、この二つの物語が交差している。このような構成を通して、男女を問わない〈母なる神〉への普遍的な渇望、及びジェンダーを超えて具現化される〈神の愛〉が描かれているのである。これらの分析を踏まえ、ジェンダーや個々の宗教を超えて融合する、文字通り普遍的（カトリック）な神のイメージの創出という作品理解から、遠藤晩年の宗教観とジェンダー観の到達点も確認した。

終章

終章では、まず、初期・中期・後期の遠藤文学を通じて、宗教とジェンダーという二つのコードが交差しながら描かれていることをまとめた。これまで、遠藤の宗教観は主に西洋と日本の文化の差異という視点から捉えられてきた。しかし本論文では、宗教一般が抱えているジェンダーの問題を踏まえながら、〈ジェンダー〉の視点で遠藤文学を分析することで、遠藤の宗教的模索に絡むジェンダーの限界性や超越性が明らかになった。つまり、遠藤の文学には、洋の東西を問わず、家父長社会のなかで制度化された宗教におけるジェンダー的な抑圧に対する批判的な思索が見出され、ジェンダーのアプローチから神のイメージを刷新する試みがなされている。このような遠藤の文学的営為は、同時代の西洋の神学における動き、とりわけフェミニスト神学の思想とは共通した趣旨があり、極めて近似的な方向へ向かっていたということを本論文で解明した。

次に、宗教とジェンダーの問題に絡み合って、〈痕跡〉が重要なモチーフとして描かれているという結論を提示した。遠藤作品には、宗教とジェンダーのパフォーマンスに失敗する「挫折者」「劣等者」が多く描かれている。彼／女らは〈痕跡〉を通して、〈魂〉の次元で他者と神の相互的な関係性を見出し、救われていくこのように、彼／女らをも包み込むような、根源的で普遍的な〈母なる神〉のイメージ、そして一人も見棄てることのない、神のインクルーシブな〈愛〉が遠藤の宗教観の到達点であるという結論を得た。

本論文全体を通して、遠藤が最終的に、国家、民族、文化、ジェンダーの制限を超えて、すべての人と〈魂〉の領域で巡り会うキリストを描こうとしていることが確認された。さらに、遠藤の最終的な宗教観は、〈母なる神〉、〈同伴者イエス〉、そして〈痕跡〉を通して働く聖霊という遠藤独自の「三位一体の神」体系としてまとめられることを本論文では最後に提示している。